

# HIGO プログラム選抜試験

2015. 2. 5

HIGO program selective examination for Kumamoto University

## 小論文（日本語版）

試験時間 1時間30分

(15:00~16:30)

Short Article

Duration of examination 90 min

(15:00~16:30)

### 注意事項 Attention

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子は開かないこと。

Do not open this booklet without the examiner's permission.

2. 問題用紙、解答用紙に乱丁等がないか確認すること。

Please check to ensure all pages are present in the correct order.

3. 試験問題は2題あります。どちらか1題を選択し解答すること。

Select any one question to be answered among the questions **I**, and **II**.

4. 解答用紙をとじているホッチキスは、はずさないこと。

Do not remove the staple from the answer sheets.

# I

以下は脳神経倫理学(neuroethics)に関するアディナ・ロスキースの論文「脳神経倫理学のケーススタディー：道徳判断の本性」(2006年)の冒頭部分である。これを読んで下記の問いに答えなさい。

脳神経倫理学が関心を寄せるのは、脳の働きについての科学的理解の驚異的な進歩が、実践的およびより抽象的な概念のレベルで、社会にどのような影響を与えるか、また与えるべきかについてである。脳神経倫理学が独自の研究領域として出現したのはほんの数年前のことである。新しい学問分野の開花や新しい科学の出現を確信をもっていえるのは、常に事後的なことだが、脳神経倫理学が最近受けている評価は、われわれはこれから長らく社会的・知的関心の的となるものへの最初の衝撃を目撃していることを示している。

政治的また経済的な出来事によって促された公共心の高まりと、生命科学における急速な進歩が組み合わせあって、われわれは、脳機能の知識の急速な発展と技術的専門知識の増加を、どう生きるべきかについてのより一般的な思考と、どのように調和させたらよいかと自然に考えるようになった。これらの関心の証拠として、脳神経倫理学にかんする論説が、科学雑誌のみならず、多くの主要な新聞や雑誌にも顔を出してきている。脳神経倫理学関係の出版物は最近非常に目を引いてはいるものの、対象範囲が相当に広く、単なる印象による記載をされる傾向がある。(中略)

最初に、哲学の世界でも科学の世界でも一般に、まだ脳神経倫理学を正統な研究と認めていないことを述べなければならない。自分を特に脳神経倫理学者として位置づけている少数の専門家の間でさえ、その範囲についての共通理解はまったくない。脳神経倫理学が生命倫理学の一部にすぎず、それがまったく目新しいものではないことを強く主張する者もいる。また、認識対象としての脳と身体にかんする言説と、身体を伴い認識する主体としての脳にかんする言説を統一できるという考えを疑い、ただひとつの名前の下にそれら二つを統一することは単なる希望的観測にすぎないと主張する者もいる。私はどちらの議論にも直接応えるつもりはないし、脳神経倫理学が新しく一貫性のある学問領域であると立証しようとするわけでもない。私が示したいのは、一見すると脳神経倫理学はさまざまな関連のない関心の集積からなっているようであるが、脳神経科学と倫理学の合流地点に現われる問題がきわめて密に相互に関連しているため、それらを単一の全体とみなすことは擁護可能であり有益でさえあることである。とはいえ、私は脳神経倫理学の自律性や統一性にかんする疑問に何らかの確実な答えを出すことは、時期尚早であることも認める。

私の見るかぎり、脳神経倫理学は、「脳神経科学の倫理学」と「倫理学の脳神経科学」という、別々に同定され、しかも相互依存する二つの探究の融合体である。脳神経科学の倫理学自身も二つの異なる下位領域よりなる。私は他の場所でそれを「実践の倫理学」と「脳神経科学の実践的含意」と名づけた。実践の倫理学は、脳研究の実践と脳神経の病気の治療の実践を指導すべき健全な倫理的原理を明らかにすることに関係している。他方で脳神経科学の倫理学的含意は、脳の機能の理解における進歩が社会観、道徳観、哲学観に与える影響を探究する。脳神経倫理学のこの分野はすでにかんりの注目を集めている。し

かし、倫理学の脳神経科学が受ける注目はそれよりだいぶ少ない。倫理学の脳神経科学とは、大雑把に言えば、倫理的行動を理解する科学的アプローチである。倫理的思考と、さらに広くは、社会的相互作用の脳神経科学的基盤は、研究可能な領域であることが次第に認められてきており、ますます多くの研究者がそのような複雑な行動に関係する脳のシステムの解明に専念している。

脳神経科学の倫理学はおそらく科学者より哲学者や政策立案者に適した場であろうが、倫理学の脳神経科学は、少なくとも当初は、紛れもなく科学的であるように思える。その一番の関心事は、価値表現、道徳的推論、道徳的行動を神経生物学的に理解することである。しかし、倫理学の脳神経科学がそのような純粋に科学的な探究を超えて、倫理学自体の領域へ拡張するのは避けがたいだろう。たとえば、メタ倫理学\*における多くの哲学的探究は、価値の本性、とりわけ倫理的な信念や判断の本性に関係している。慈善を行うことはよいという判断は、サンプラスがよいテニスプレーヤーであるという判断とどう違うのか。道徳的観点を欠く評価的判断と道徳的正しさの判断の間には、本質的な違いがあるのか。論理的推論や意思決定、帰納的推論や情動的反応などの、認知的活動と道徳的熟慮が関係する脳の領域とプロセスの把握は、道徳的か否かの分類枠組みの基礎を形成する活動の間の重要な類似性と相違点を明らかにするかもしれない。たとえば事実として、道徳的推論は、ある特定の心的プロセスとより多くの類似性をもつと判明するかもしれない。現代の画像技術を用いれば、そのような問いにアプローチできる。

(アディナ・ロスキース「脳神経倫理学のケーススタディー：道徳判断の本性」『脳神経倫理学』ジュディ・イレス編、高橋隆雄・桑和彦監訳 篠原出版新社(2008年)より。文中の参照文献は省略してある。)

\*メタ倫理学：「人はどう生きるべきか」「社会はどうあるべきか」を探究する「規範倫理学」とは異なり、「善とはどういう概念か」「自由と幸福はどのように関係するか」など、道徳や倫理の概念の分析を研究対象とする。

問1. 「脳神経科学の倫理学」と「倫理学の脳神経科学」とはどのような研究領域か。わかりやすい例を挙げて400字以内で説明しなさい。

問2. 脳科学の進展により、脳のある部位の一定の刺激が社交力を大いに増進させること、しかもそれにかかる費用は安く副作用もほとんどないことが確かめられたとする。その場合、教育の現場で、保護者からの要求に応じて、対人関係に問題のある子供の治療や、普通の子どもの社交力向上のためにそれを用いてよいだろうか。このことについて、自分の考えを800字以内で述べなさい。

## Ⅱ

20世紀は国民国家間の領土や資源、イデオロギーを巡る戦争の世紀でした。しかし21世紀の世界は、異なる宗教、民族、文化による摩擦が、大きな紛争やテロの原因の一つになっています。このような社会的亀裂を抱えこんだ現代社会において、どのような社会秩序や平和の構築が可能なのかについて、具体的な事例を挙げて論じなさい。